

第7回教育懇談会議事録

日時：平成26年2月6日（木）15:30～17:30

場所：愛知県三の丸庁舎 アイリスルーム

<大村知事>

みなさん、こんにちは。本日は、忙しい中、7回目の教育懇談会にご出席いただきまして、誠にありがとうございます。

また、今回は特別参加として、福岡県にあります国際バカロレア認定校のリンデンホールスクール中高学部校長で、広島女学院大学国際教養学部国際バカロレア調査研究室長の大迫弘和様と、漫画家の江川達也様にご出席をいただいております。重ねて感謝を申し上げます。ありがとうございました。

前回、10月1日に開催しました第6回の懇談会では、「日本一の産業県・愛知を支えるキャリア教育・職業教育のあり方について」を議題に、ご議論いただきました。

皆様からは、専門学科のあり方や職業教育の充実などをはじめ、様々なご意見をいただきました。今後、県立高等学校教育改革の基本計画を策定してまいります。その中で、時代のニーズに合った職業学科のあり方につきまして、検討を進めてまいりたいと考えております。また、併せて比較的長期の現場実習の実施についても、可能性を探っていければというふうに思っております。

さて、今日、7回目の懇談会の議題は、「学校教育におけるグローバル人材育成のあり方について」でございます。

経済のグローバル化が急速に進み、人、モノ、カネ、情報が国境を超えて日常的に移動しております。特に、近隣のアジア諸国では、目覚ましい経済発展が続いているわけですので、それをどういうふうに生かしていくかということも課題でございます。国際的な視野に立ち世界を舞台に活躍できる人材、新しい価値観を創造し、日本の未来を切り開くことができる人材の育成が求められているところでございます。

私ども愛知県は、昨年3月に、「あいち国際戦略プラン」を策定し、グローバル人材の育成に取り組んでいるわけですが、今日は、そうした現状をご報告させていただいて、皆様から率直なご意見をいただければ幸いに存じます。

なにとぞよろしくお願いをいたします。

〔事務局から出席者紹介・資料確認〕

<大村知事>

本日のテーマは、「学校教育におけるグローバル人材育成のあり方について」ということとございます。この議論が終わった後、少しお時間をいただいて、第2回、第5回の懇談会でご議論いただきました、愛知県の高校の入学選抜制度改革につきまして、検討結果のご報告をさせていただければというふうに思っておりますので、よろしく願いいたします。

それでは早速、懇談会に入っていきたいと思います。まずは、愛知の学校教育におけるグローバル人材育成の取組について、事務局から簡潔に説明をお願いします。

[事務局から資料説明]

<知事>

今回は、前半後半2回に分けて、前半は総論的に国際社会の中で、活躍できる人材に求められる資質・能力とは何かについて、一通り皆さんのご意見をお伺いしたいと思います。そして、後半は、各論的に、グローバル人材を育成していくために、学校教育でどのような取組が求められるかについて、ご意見を伺ってまいりたいと考えております。それでは、名簿の順に江口様からお願いいたします。

<共立総合研究所取締役副社長 江口忍氏>

グローバル人材に必要な力と言うことですが、私は二つ指摘をさせていただこうと思います。一つは、異質な人、異質な文化を受け止める力、もう一つは、自分の考えを、できれば論理的に、堂々と発信する力、この二つが大事だと思います。語学力以前の話として、この2点を言いたいと思います。これはなぜかという理由がございまして、私自身がグローバル人材になりきれなかったという苦い思い出、体験があります。

私は、今は、この共立総合研究所というところにいるのですが、大学を卒業して、最初に勤めた会社というのは日本長期信用銀行でございまして、10年間そこにおりました。証券関係の仕事をやっております、入行6年目、27歳の時に、長銀のロンドン現地法人のところに行くと、出向しました。ロンドンに3年半勤務しました。その会社というのは、現地化が随分進んでいまして、社長さんも外国人、ローカルスタッフ100人に対して、日本人は14人。私は27歳で行って、部下ローカルスタッフ14人を抱える課長という立場で、採用から、解雇、ボーナス交渉というのをずっとやっておりました。海外赴任なものですから、語学力があるということが求められるわけで、私はTOEICが740点で行きました。英語を自信持つてできるよというレベルではないけれども、一応、海外赴任をするには、まあまあというレベルのところで行ったんですけども、実際に行ってみて、私は大きな挫折を味わいました。それは何かというと語学の問題ではなくて、

私と全くバックグラウンドが違う彼らは、口八丁、手八丁で、「俺はこんなに実績を上げたんだから、ボーナスをよこせ」とか、「解雇する」と言ったら、「嫌だ、嫌だ」と言う、そんなことをいつもやりあうわけなんですね。

私自身、27歳になるまでに、外国人とちゃんと接したことが一度もなかった。当時は、小・中学校には、外国人の先生なんていませんでしたし、大学でもそういうことはなくて、まともにしゃべったのは、その赴任前にベルリッツに通って、英語の先生に、ちょびっとしゃべったぐらいという程度の外国人との直接接触体験で行ったんですけども、どこでめげてしまったかと言うと、言葉以外のところでめげたんです。私は結局何をやったかと言うと、お恥ずかしい話ですが、自分の後任の課長を一人ローカルで採用しまして、私自身は、日本人相手のポジションっていうのを別に作って、そこにある意味逃げ込んだんですね。それが、向こうに行って1年くらい経った時。稼ぎという部分では、それはちゃんと稼ぎましたが、結果的に、グローバル人材になるチャンスというか、そういう機会があったのに、それができなくて挫折をしたということがございます。そういうバックグラウンドから、やっぱり異質な人、異文化を持った人と自分と全然違う人達と接触する機会を持っていなかったということが、私自身の失敗のもとになるんじゃないかなと思っています。

2点目のことですが、自分の考えを発信する力、これも先程の話に関連しますが、やはり外国の人というのは、自分の意見を合ってようが、間違っようが、堂々と言います。私なんかだと、流暢に言わなきゃいけない、かっこよく言わないといけないという気持ちが当時はあった。あと、もう一つ、日本の教育の特性だと思います。自分の意見を堂々と表明するということをさせない学校教育、小・中・高校と。それがあのように思います。それが、後で、今日の最後のパートで、入試制度の話がまた出てくるということですけども、自分の意見を堂々と言うことを育てないような入学試験制度というのは、一つあるが故に、それとも関連をして、自分の意見を言わないような子が育つと。そういう子たちに、高校に入って、あるいは大学に入ってから、自分の意見をちゃんと持って、自分の意見を堂々と言いなさいと言っても、その前の部分のところでバックグラウンドが、そういう習慣を持っていないのに、いきなりやれと言ってもなかなか難しいだろうと思います。

<愛知県経営者協会専務理事兼事務局長 柴山忠範氏>

企業が求めるグローバル人材のイメージというのは、先程ご説明のあった資料1ページの国の審議会の提言にある、こういうことだと思います。ただ、学校を出て、企業に入って、すぐにグローバル人材として活躍することはまずあり得ない。その企業を代表して行くわけですので、少なくとも一人前に仕事ができるということが最低条件になります。その時にももちろん外国語をしゃべれるというのは、もちろん必要な条件だと思

いますが、今、江口さんがおっしゃったように、仕事をする上で、必ずしも流暢な英語でしゃべられるかどうかということではなくて、相手にきちっと伝えられる英語がしゃべられるかどうかということが今は大事だと思います。と申しますのは、かつてはアメリカですとか、イギリスですとか、英語を日常的に使っている国での仕事を中心だったわけですが、最近ではむしろ、中国であったり、東南アジアであったり、インドとか、アフリカとか様々な国々でビジネスをやるようになっていきます。そういった国々では母国語が別で第二外国語といいますが、コミュニケーションのツールとして、英語を皆さん、片言でしゃべるといった機会がありますので、そうすると正確に伝わる英語というのが大事になると思っています。それから、当然、ビジネスをやるというのは、江口さんがおっしゃったように、異文化の人達とある種戦いながら、別の面では調和をなんとか図りながらということですので、かなりストレスのたまる仕事であることは間違ありません。そういう面では、やはりタフな人材で、ある種好奇心の強い人達が適用できると、色々な人から聞きます。ある種の英語がぺらぺらでということよりも、むしろ、どんなところでも対応できる、そういう強さを持った人が大事だと思っています。

<関西大学政策創造学部教授 白石真澄氏>

グローバル人材の定義ですが、まず1つ目は、日本を起点にするのではなく、地球規模で物事を考えられる視野を持つということ、2つ目は、国境を超えてキャリアアップできる、人種とか、民族とか、国籍に頼らず、国境を超えて、どんどん仕事の力を付けていけるということ、3つ目は、とても大切なことだと思いますが、専門分野での知識・経験、自分の幹みみたいな専門分野を持っているということですね。

これは今日の議論にはちょっと関係ないかもしれませんが、日本の文化、歴史、そして、リベラルアーツの素地がある、単にお勉強ができるのではなく、やはり自国に誇りを持ち、自国の文化背景がきちっと分かっているとはいけないと思います。海外の会議に行きますと、仕事の話以外に、やはり歌麿がどうだとか、広重がどうだとか、日本への興味は深く非常に皆さん、勉強していらっしゃるんですけども、普段、勉強していないと、全く、そんなの分からないわけですね。やはりどれだけ教養があるかということが大事だと思います。性質としてはタフで未知の分野にどんどんチャレンジしていきけるような、打たれ強い人でなくてはならない。

今日は、若干、水をかけるような話になってしまうかもしれませんが、次に、私個人の印象をお話させていただきますと、80年代後半以降、ずっと日本企業の国際化ということが言われてきました。経済成長を遂げて、やはり経済的な規模に見合った国際社会の貢献をという名のもとに、語学力があって、海外でコミュニケーションができて、日本のビジネスを開拓できる人というのが、ずっと望まれてきたと思うんですね。私が元いた民間企業も非常に高いお金を出して、MBAを取らせたり、海外留学組を社内選抜で、

年に5人、10人と送り込みました。でも、帰ってきたMBAを取ってきた女性に、雑用的な仕事をさせ、使いこなせなくて、ほとんどの人達たちが辞めていきました。辞めるということは良いことで、例えば、三木谷さんもそうですし、DeNAの南場さんも企業から留学後に起業されたのですから、そこでチャンスを得て、次のステップができるということでは良いと思います。

私は、企業がデフレの中で、国際教育の場を大学にシフトさせてきたと思います。私どもの大学でも、英語のレベル、TOEICやTOEFLを受けさせて、レベル別に英語教育をしたり、提携校をたくさん作ったり、交換留学をさせたり、なかなかこれは集まりません。やはり学費プラス50万円から60万円のお金がいらしますので、相当親御さんの懐も大変だと思います。では、彼らがなぜこうしたところに行くかということ、日本企業に有利な就職を求めるためなんです。エントリーシートに、語学の成績とかが書けなければいけませんし、色々な頑張ったことを書くので、留学は有利だからです。

今、グローバル人材というふうに言われますが、こうした過去の政策の焼き直しが続いているのではないかと思います。こういうことを繰り返していても国際的な人材、グローバル人材は出ていかないと思います。例えば、海外のイングランド銀行とかを見ても、インド人とか、シンガポール人とか非常に多国籍です。イギリスの大学を出て、そこに腰を落ち着けるといって人がいて、そういうダイバーシティ、多様性の中で国民性が育まれているからこそ、やはりグローバルな視野を持った人達ができていくと思います。

この島国の中で、単一性の高いところで、グローバル人材といくら言ったとしても、私は限りがあると思います。今、日本に来ている留学生が13万8千人おりまして、法務省の調べでは、日本に就職をしたいという、つまり就学ビザから就労ビザを出した人達、1万1千で、許可された人達は1万です。1学年としてもほぼ4人に1人くらいが志望していると思います。なかなか日本企業に就職しても、語学がしゃべれることとか、海外経験を持つこと、海外のバックグラウンドがあることが正しく評価されるか、これは難しい問題だと思います。

私の知人で、両親が中国人と韓国人で、そして日本に長くいる女性がいました。彼女は、韓国語、中国語、英語、日本語の4カ国語ができるのですが、どんな仕事をやらされているかということ、翻訳とか、海外出張の際の通訳です。果たして、グローバルな経験が日本の企業で、非常に評価されて、高いポジションに付けるかといったら、なかなかそうではないんです。私は、教育の分野でできることはあると思いますが、そこでやったとしても、日本全体の素地が変わらなければ、グローバル人材は育っていかないのではないかと思います。

例えば、73カ国に拠点を持つ、日本の非常に大きな企業がありまして、EU委員会から独占禁止法で訴えられた時に、英語がしゃべれて、きちっと独禁法が分かって、EU委員

会と交渉できる人が社内にはいない。日本企業のそういうところにおいても人がいないんです。そういう人達がどこにいるかと言うと、日本企業ではなく、海外に他流試合をしに出て行っています。ですから、今の日本の文化風土のままで、グローバル人材と言っても非常に限界がある、そういうような思いを持っております。

<学校法人河合塾教育研究部長 谷口哲也氏>

白石先生の前半部分で、地球規模で考えられる視野を持つということ、人種や民族や国籍を超えて仕事していくこと、自分の専門分野を持っているということが定義だというお話がありました。河合塾でも、大学で国際やグローバルという名称もつ学部長や学科長の教員を対象に、「グローバル人材に必要な能力とは」という質問をしたので、その結果を報告します。

やはり多いのが「外国語の実践的な運用能力」。それと同じくらいの割合で、資料1の1ページの要素Ⅲの「異文化理解力」。その中で特に必要な知識が、白石先生がおっしゃった世界の宗教、哲学への理解とか、それから歴史ですね。世界だけでなく、日本の歴史理解も必要だということです。そして「海外で生活できる力」。これをヒューマンスキルと呼んでいますが、少々不便なことや理不尽なことがあってもそれを切り抜けるタフネスさとか、チャレンジ精神で、先程から出ていることです。

ここからは私個人の見解です。グローバル人材に必要な能力・資質は何かと問われたら、最近のアメリカの大学教育で中心になっているリーダーシップ教育に私は注目しています。このリーダーシップは、日本で言うと権限やカリスマ性とひっつけて理解されています。本日の資料を見てもグローバルリーダーという言葉がでてきますが、日本語としての意味で使われています。私が申し上げたいリーダーシップは、統率力や指導力という要素だけではありません。全体のチームや組織が目的を果たすためであれば、自分が指導者でなくても良い、メンバーやフォロアーでも良いんだということです。全体の目標が達成されることが最適ならば、自分の役割が何かを認識しながら、他者を巻き込んで行動できる力がリーダーシップであるとアメリカでは定義をしています。このようなリーダーシップを高めていくためには、問題解決型の場面で解決提案の行動を何度も何度も経験していくことが有効だとされています。これが一つ。

もう一つは、やはり精神性なんですけど、オープンマインド。心理学で言うと「ジョハリの窓」という有名な理論があるんですが、オープンマインドの人が、グローバル人材の資質を持っているということです。自己肯定感や自己信頼が高い、たとえば大阪のおばちゃんはその資質を持っている気がします。

<愛知淑徳大学文学部教育学科教授 中野靖彦氏>

私のいまの大学の理念が「違いを共に生きる」なのですが、違いというのは人種や

宗教を全部超えて、それを受け入れていくということです。高校までに受けてきた学生が、すぐにそれに染まるかと言うと、なかなか難しい。私はスポーツが好きですが、こういう話を聞いたことがあります。海外に出ていって、活躍できる選手とそうでない選手が分かれる。どこで分かれるのか。日本ではものすごく有名で活躍できても、海外に行っても活躍できない人の生活習慣を見てみると、味噌汁がないとだめだとか、日本食が食べられないとだめだという人で、そこで崩れていくそうなんです。「郷に入れば郷に従え」と言いますよね。そこにいた時に、その食べ物やいろいろなものに入っていけるタイプというのは、即適応できるわけですね。

私も海外に行く前に、6ヶ月間英会話に行きましたが、とてもじゃないけど悩んだわけで、私は取ってこういう手を取ったんですね。私は英語がしゃべれませんという形で対応していくと、向こうはすごく丁寧にやってくれるわけです。こちらがちょっと英語をしゃべれますと言うと、ペラペラとやられてしまう。英会話だけかと思っていたのですが、そうではなくて、食べ物であり、文化であれ、いろいろなものに適応することが大事で、日本で適応していて、海外に行った時に、日本のものをそのまま持っていくタイプだったらだめなんです。外国語をしゃべることはいいことだと思いますが、それと同時に、行った先の文化、生活が何なのか、食べ物を通して、現地の人とコミュニケーションができるわけですよ。それが可能でない限りは、なかなか自分も出せないし、身につくものもない。

そういう能力というのは、一体何だろうかと。大学もこれから入試が変わっていきますが、見ていて、括弧の中に英語の単語を入れるような試験をやっている、これはなかなかグローバルになっていかないと。これは事実だと思うんですね。そういう面で、私はもう一つ別の側面の能力とは何なのか、最終的に大学を卒業していく時の力は何なのかをはっきり示すべきであって、それに伴って、それぞれの段階で教育していかないと、これはなかなか育たないし、英語に強くなりたいと思ったら、どこか国外に放り出す、行ってこいというぐらいのつもりでやって、適応できたらこの人はやっていけるだろうなど。そういうことを考えていながら、教育の中に、或いは人を育てるということの中に、そういう面が入ってくれば私は少しずつ伸びていくと、そんな気持ちでいます。

<愛知教育大学学長 松田正久氏>

十数年前、二十年前ぐらい前は、大学は、「情報」「環境」「国際」がキーワードでした。今、言われているのは、「イノベーション」「グローバル」。特に日本では理工系人材の育成というのが盛んに言われています。そういうところに意識が収束しているという状況があります。一方がグローバルですよ。僕は、いつも学生にも言うのですが、日本人でこの島国に生まれて、島国で育っていくと、まず国境というものが理解できない、そ

れから宗教が分からない。世界の紛争の要因は、民族、宗教、国境。そこを超えることができれば、既にグローバルになっていると思いますが、こうしたことをきちんと理解できるような体験もないですし、そういう教育もなかなか行われていないという側面があって、これらをどう克服していくかということが、グローバルへの道だし、そのことが先程おっしゃった地球規模でものを考えられるようになるということだと思います。

言葉がしゃべれるというのは、スキルであって、それでもってグローバル化になったかと言うと、それは決してそんなことはなくて、今の学生達も、新聞を読まない、世界がどう動いているかを知らない、そういう中で教育を受けていて、国際的な様々な流れをどういうふうに掴んでいくかということに関心を持たせるようなことが教養だと思います。そうした教養をどう大学の時に身につけさせていくかということがとっても大事で、そうした教育をどう作っていくか、日本は言ってみれば均質教育ですから、それではだめなんですね。少子化が進んできた時に、一人ひとりの個性化をどう進めるか、具体的に教育現場でそうしたものをどう引き出すのかということをやっていないと、グローバル化も進まないのではないかと思います。

若い教員は、結構英語はしゃべれるんです。僕らの世代なんていうのは英語はしゃべれないんですよ。僕は4年ぐらい海外にいましたけれど、1年目は全くだめでしたね、2年目でやっとしゃべれるようになって、3年目、4年目でそれなりになったのですが、行けばしゃべれるようになるのは確実です。でもそれがグローバル化じゃないので、先程おっしゃっていた異文化体験というものを、どういうふうに教育の現場を通じてやっていくかということ、小学校の時からやるしかないんですね。大学でグローバル教育と言っても、そこですぐにグローバル化になるはずがないんです。小さい時からきちんと系統立てて、そこに個性化を取り入れながら、教育をしていく。先生自身がグローバル化しないといけないので、教員のグローバル化が大事だと言っています。そのためには、いろいろなところに行きなさいと学生に言うのですが、女子学生は手を挙げるんです。本学でも、学生に海外留学に行きたい人と聞くと、手を挙げるのは女子が多いです。なぜかよく分かりませんが。女子はチャレンジ力が強くて、関心もあって行ってくるのですが、同時に、男子学生も沢山行かせるようにしないといけないと言っています。

一方、行かせることも大事ですが、いろいろな国から人を連れてきて、そうした人達の交流をさせることも大事です。今年度は、タイとインドネシアと韓国に、学生に来てくれとリクルートに行ってきたんですが、お金の問題があるんですね。いろいろな補助システムを使ってやらないとなかなか進まないなと思います。自己負担がないような形でやらないと、お金もかかるし、そういうことも覚悟の上で進めないと、これから本当のグローバル化は進まないんじゃないかな。やっぱり教育のシステム自身も考えて変えることが大事だと思います。

<漫画家 江川達也氏>

東京に住んでいると、名古屋・愛知出身の人にあんまり会わないんですよ。何故かと言うと、大学も名古屋辺りで決めて、東京の大学へ行った人もだいたい就職を名古屋ですするというのが、愛知県や名古屋市の傾向としてあるんですね。こういう愛知県から出ない人にグローバル化ができるのか、要するに日本国内ですらよそに行かない人が、グローバル化って言う以前に、もうちょっと他の地方に行った方が良いかなと思うんですね。むしろ、外に行かないのが愛知県の良さなので、まず、行かないでグローバル化っていうのを考えた方が良いんじゃないかということが第1点です。

グローバル化を語ると言っても、私もそんなに外国に行っていないのですが、自分の体験談でいくと、大学2年の時に、三十何年も前ですが、アメリカに1ヶ月間ホームステイに行ったんですよ、その当時は珍しいんですが。ホストファミリーの中に入って、1ヶ月間くらい英語で生活したんですが、僕は数学科で英語はあんまりできないんですよ。でも、とりあえず何にも準備せずに行ってみたら、結構イケたんですよ。1日にしてもうばんばんしゃべれて、何でかなと思ったんですけど、ヒヤリングはだめなんですよ、普通の日本人と違って。基本的に僕は人の話を聞かないでしゃべるのが得意だったんで、がんがんしゃべってたら、何でも良いからしゃべってたら、すごいギャグとかも超うけちゃって、これ簡単なんだみたいな。

実際に聞く話では、文系の人って海外に行って結構ノイローゼになるらしいですよ。代表的な人は夏目漱石という人がいるんですけど、あの人はやっぱり海外に行ってノイローゼになって、ちょうど同級生で南方熊楠っていう人も海外に行くんだけど、全くノイローゼにもならず、イギリス人にゲロぶっかけたりして、馬鹿にしてくるとすごい怒って、ケンカしてたんです。その違いつて何かあって思ったときに、理系の人結構大丈夫らしいんですよ。文系の方は、要するに英語が得意で英語でいくと、英語でしゃべられると負けちゃうじゃないですか。だから、理系の方は海外に行っても、やっぱり理系ができるんで、中3くらいの子供がいて、どういう数学やってるか見ると小学生みたいな数学やって、結構馬鹿だなと思って、ちょっと教えてやったりとかして。だから何だろうな、海外へ行くと強いつていうのは、たぶん何か得意技を持っている人が強いんじゃないかなと。外国でも何かすごいなって思われるような得意技を持っていると確実に強くてですね、あと絵を描いてやったら「すげえ上手い」とか言われて、まあ、その後漫画家になるんですけど。「すげえ上手いな」って言われて、要するに、世界でも通用するのは言葉を超えた何か相手をうならせる技術があれば、確実に強いなっていうのは感じました。

あとは、皆さん言われるように、海外に行って一番思うのは、日本人は日本のことを知らなさすぎるんですよ。実際、歴史もいろんなことも知らなくて、それをやっぱり学校の教育で全くやっていないのがだめで、やっぱり海外に行っても誇れるような日本

の文化ってあるんで、そこらへんを強く教えること、あとは、宗教に関しては本当に、大体ギリシャ神話って、西洋に行くときあたり前のように知らないとお話しにならないらしくて、あとは、聖書、コーランですよ。ここらへんを知ってるっていうか、あんまり読んだ人いないじゃないですか。コーランとか何が書いてあるとか。ここらへんを義務教育である程度はさわった方が良いでしょう。ユダヤ教とキリスト教とイスラム教がどういう関係にあるのかっていうのを、やっぱり学校でまず教えなきゃいけないんだけど、副読本にちらっと書いてあるくらいであんまり教えないんで、ギリシャ神話とかギリシャ哲学もそうなんですけど、そこらへんのベースを教えておくと、海外に行って会話に困らないと思います。

あとは世界史と日本史。世界史に関しても、今ちょっとCGの学校に行っていますが、そこにスペイン人とか来てるんですけど、やっぱり僕も歴史が趣味だったんで、なんかスペインだから、スペインの宗教裁判の話とかレコンキスタの話とか、イスラム教に相当やられてた時代の話とかすごい喜んでくれて、やっぱり自分の国のことを知ってもらえてると嬉しいんで、そういう海外の国の歴史っていうのももっと教えるべきだなと思います。

さっき言った戦略的に愛知県から外に出ずに、国際化を図るにはどうしたら良いかと考えた時に、フランスで最近ちょっと韓国の悲しいニュースがありましたけど、韓国の慰安婦の漫画だけは漫画展示会で展示させられて、日本のそれに反するものは閉め出されるっていうような事件があったんですけど、それは置いておいて、海外で意外に評価されているのが漫画だったりするわけですよ、ヨーロッパで。実際、漫画家とかアニメーターって、なんのグローバル化もないわけですよ。ただ部屋に籠もってね、オタクみたいにしこしこやっているんだけど、結局日本が誇るものをどンドンネットとかそういうもので出していくと、海外が反応するんですよ。愛知県は、要するに世界の情勢を読みながら、世界で通用する何か商品とかいろんなモノを作っていくというスタンスを出していけば良いんじゃないか。結局、海外に対してへりくだりすぎなんですよ日本人は。だから「お前らが来いよ。」みたいな、「お前らが日本語やってこいよ」くらいのそういう気合い、「俺たちはすごいんだぞ」というくらいの戦略があった方が逆に向こうもなびいてくるかなと。

あとは、今はネットがあるんで、実際に女の子なんかはネットで、何か危ないんですけど、海外の人と友達になっちゃって、それで、海外の人と英語でコメントとかやったりして、まあ Skype もありますから、それで勝手に英語の勉強もできたりするんで、海外に行く必要はなくて、日本にいてどうやって海外の人達を凄いて言わせるかっていう戦略を練っていくような教育になれば良いんじゃないかなと、私は思います。

最近 Facebook やってて、ネットで出回って笑えましたが、スペインかどっかの人がオタクのアニメを作ったんですよ、美少女アニメを。これがもう傑作で、やっぱり海外の

人も日本のアニメを見てこんな作りたくなって、だめだめでおかしいことになってるんですけど、下手くそな日本語で。でも、作って出しているくらいやっぱり日本の文化ってというのは、全然グローバルなんで、そんな卑下しなくて教えてやるぐらいのつもりで、こっちの文化を愛知県にいながら出していくっていうくらいの戦略を固めれば良いんじゃないかと思います。

<リンデンホールスクール中高学部校長 大迫弘和氏>

今日、私がここに座らせていただいているのは、国際バカロレア、IBのことをお話しするということだと思います。おそらく今日この場にいらっしゃる方々のほとんどが名前は聞いたことがあるんだけど、国際バカロレアってどんなものなんだろうというような状態だと思います。それは日本全体がそうなので。

お手元にある私の配付資料を見ていただけますでしょうか。グローバル人材ということで最後は話をさせていただきますが、今日、私はIB認定校であるリンデンホールスクール中高学部の校長という立場より、御承知かと思いますが、2018年までに200校のIBスクールを日本国内に生み出すという政府方針がございます、その方針のために文部科学省とそれから国際バカロレア機構に協力して、その200校プロジェクトを推進しているという立場から皆さん方にお話しをさせていただければと思っています。

この表紙にありますDP、ディプロマプログラムと言うんですけども、今から、これを実施する学校を200校作ります。このディプロマプログラム自体は1968年に生まれていますので、もう45、46年の歴史を持ったものです。内容はもちろん随時改訂をされていて、1968年はこの形とは違っていたのですが、私自身は45、46年の歴史の内、ほぼ半分の二十数年をこのIBの教育に携わって、このIBで勉強していった子どもたちを世界に送り出しているという背景を持った者です。このIBのディプロマプログラム、DPと呼びますけれども、これを今度日本語で行う部分を作ってですね、日本の学校でもそれを導入できるようにという仕組みを作った中での200校プロジェクトを進めているんですが、先週でしたか、東京大学の法学部、教養学部の方でこのIBを入試に含んでいくと、その前の週には筑波大学がIB特別入試で、これはもうセンター試験なしで全学群でIBの生徒を受け入れていく、その前には慶応大学法学部がこれもIB特別枠へ移行という形で、今IBについていろいろな大学が受け皿として用意してくださっています。

そういう流れの中で、このIBというものがこれからどれだけ広がっていくのかというお話しになるのですが、実は個人的には、私は2人子どもがいるのですが、2人ともIBを勉強して、そして海外の大学に行きました。妻もIBの学校で働いていますので、家族全員IBということで、家族団らんの話がIBという特殊な家庭なのですが、そして、公的にもずっとこの仕事をしていますので、現在、先程申し上げたような関わりを持っていますが、その中で感じているのは、多くの方がIBはとりわけ海外の名だたる大学へ

生徒達を送り出していく、そういうプログラムじゃないかというふうに考えていらっしやるということがあります。それも1つの大きなIBの意味ですが、この図の円の一番真ん中を見ていただきますでしょうか。英語で申し訳ありませんが、「IB LEARNER PROFILE」というふうに書いてあります。円の中心というのは、そのプログラムの中心ということですよね。このIBというものは何を指してやっていくか、この真ん中の「IB LEARNER PROFILE」を最終目標としている。それが次のページにある10個の像、Profileになります。この10個のものを目指して、このIBというものの教育が行われていく。この図を丁寧に見ていただくと、今日出席の方々が既にご発言なさったファクターというのはほとんど含まれていると思います。例えば、これはジュネーブが発祥の地ですから、外国産のものでよね。こういう外国産のものを日本の1条校に入れていく際日本に関しての教育はどうか、一番右下を見てください。「Open-minded (心を開く人)・自国の文化や自分の歴史を理解し」、それがまず原点だということを明確に語っているわけですよね。ですから、実はこのIBを導入するときには、ここをすごく強調してやっています。英語のことはどこに書いてありますでしょうか。左の上から2つ目「Communicators (コミュニケーションができる人)・様々な言語や」これだけです。10個のProfileのうち、英語について、これは英語で言うと「more than one language」って書いてあるのですが、実はこのプログラム、3歳から18歳までのプログラムで、今回日本に導入するのは、高2、高3の最終2年間のプログラムを導入するという形になるんですが、その3歳からのプログラムの中で7歳から第二言語を勉強するということになります。実際にこの中でも、その言語については正にこれだけ語っているだけなのです。国際水準、グローバルスタンダードの教育にとっては、言語、とりわけ英語というのは、既に当たり前のもものとして内包されている、英語教育というふうに取り立てて言うものではないということがここから考えていくことができるかもしれません。

では、この「Learner Profile」を身に付けた子どもたちは最終的に何を使命として持っているか、次のページをご覧ください。IBというのは、「Mission Statement」という使命を最上位に掲げています。このプログラムは、若者達がこの使命を実現するために学ぶのだ。その使命とは、「より平和な世界の構築に貢献できる若者を育む」、これがこのプログラムの目標です。ハーバード大学に送り込むことが目標ではないのです。次のページをご覧くださいと、「Mission Statement」、これは3段落ありまして、1段落目が前のページで、2段落目はちょっと事務的な世界中の機関と協力するということを書いてありまして、それを飛ばして3段落目を持ってきていますが、英語で言いますと「lifelong learners」と言います。「生涯にわたって学び続けていく」、そういう若者、そのベースを作っていくんだというのがこのIBの本質です。

グローバル人材は何かという、私も仕事柄様々な場面でそれに対する定義等を問われるのですが、私はグローバル人材というものの具体的な定義は、この「IB学習者像」に

全て含まれているのではないかというふうに考えています。これを今、北海道から沖縄まで教育委員会あるいは各学校にお話しに回っています。そうすると、この「IB LEARNER PROFILE」に対して、ほとんどの日本の教育関係者が共感を持ってくださいます。これが本当に私達がやりたいことだったんだと、しかしできていない、なぜか。それは違うものにプライオリティがあるからです。そこを何とか変えていかなくちやグローバル人材の育成というのは果たし得ないのではないかというふうに思います。

<大村知事>

ありがとうございました。また後ほど御意見いただきたいと思います。それでは、白石さんが途中で退席されるということで、後半は、最初に白石さんに御発言をいただいて、その後また江口さんから順次お願いできればと思います。

<関西大学政策創造学部教授 白石真澄氏>

方法論なのですが、やはり大迫先生がおっしゃったように、英語だけが目的ではない。英語は目的ではなく、ツールでございますので、そこは念頭に置いていただきたいということと、もう1つは、県でも色々なプログラムをおやりになっているのですが、これは果たしてグローバル人材と言われる人達の育成に効果が出ているのかどうか、是非評価をお願いしたいと思います。

公教育の概念に反するかもしれませんが、私は全ての人に TOEIC990 点を目指すのか、ここは疑問があるところでございます。海外で仕事がしたい、自分の専門性を持って海外でキャリアアップし、そして、世界のために貢献したいという人達を後押しするようなプログラムを作っていただきたい。例えば TOEIC の受験料は、今、5,725 円でございますけれども、これは高校生にとっては負担が大きいと思うんですね。こういうことを補助していくというのも1つだと思いますし、やはり、小学校から英語教育をと皆さんおっしゃいましたけれども、これすごく大事だと思います。今の文部科学省の基準ではなかなか上手にならないと思います。この前、私どもの家にネパールの男の子がホームステイに来ていまして、とても英語が上手なんですね。なんでそれだけしゃべれるのか、英語のしりとりでも延々やっています。そしたら、学校ではネパール語を使っちゃいけない、ネパール語禁止で英語だけだと。そういう教育をしているところには絶対勝てないですよ。特区もございますので、是非特区申請をしていただいて、英語漬けのクラスみたいなものにチャレンジしていただいても良いのではないかと思います。

愛知県下にはトヨタを始めいろいろな企業がございまして、是非海外留学資金、これは貸与ではなく給付が良いと思います。貸していただいて返すのであれば、なかなか皆さん冒険できません。いただけるというのであれば応募者もありますので、こういうことは手始めにできるのではないかと思います。

先程、江川さんが、留学生の逆輸入ということをおっしゃいましたが、インターナショナルスクールではなく、インターナショナルクラスみたいなものを作っていただいて、海外から、特にアジア地域から学生さんを入れるために、県が何かプログラムを組むということも大事だと思います。ネイティブの先生はたくさんいらっしゃいます。ALTの先生がいらっしゃいますが、彼らとしゃべっていたら、私たちはALTだけでも「NOVA」だと。なんで「NOVA」なのかというと、「NO VACATION」の「NOVA」で、余裕がなく、いろんな学校をあっち行ったりこっち行ったりするので、全く生活に余裕がない、定着率も非常に悪いと聞いています。こういう人達をもっと増やしていくための予算化も是非お願いしたいと思います。

オランダはですね、非常に移民も多いですので、宗教の時間というものがございます。オランダの祝日の日に、例えばイスラムの文化について学ぶとか、そういう時間も設けています。これは授業にゆとりがないとなかなかできないと思いますが、やはり、海外の文化や宗教、考え方に目を向けていく時間も必要だと思います。

よくグローバル人材をビジネスの面だけで捉えられがちですが、今回、ローザンヌ国際バレエコンクールでも1位、2位は日本人でした。芸術の分野や食の分野、いろいろな分野でグローバルに活躍できる人達は海外へ出ていくべきだと思います。海外でキャリアを積める人がどうやったら出てくるのかということで、英語のコミュニケーションだけに矮小化してお考えいただくか、広めにお考えいただきたいと思います。

<共立総合研究所取締役副社長 江口忍氏>

資料の中に、グローバル人材育成の取組とか、あと、参考資料の中に他県のグローバル人材育成のための特色ある取組、いろんな取組が県内或いは他県で行われているということはよく分かりましたが、1回目の発言機会の時にお話しをした、私自身の苦い経験というものを踏まえて申し上げると、やっぱり、繰り返しになりますが、小学校とか中学校の時にどれだけ外国人慣れをするか、言い方は良くないかもしれませんが、自分と違う姿をして、違う言葉をしゃべって、違う宗教を持っている子と、どうやって、どれだけ連れを作れるかというところは、やっぱり決定的に重要ではないかなと思います。

語学の話というのは、もちろんそれはALTとか様々な機会です。学んでいけば良いことですが、やっぱり語学を学ぶということの動機として、この子とどうやってコミュニケーションを取ろうかというような意欲、モチベーションの部分で言うと、単に英語が大事だから勉強しなさい、あるいは外国の宗教とか文化を理解することは大事だから勉強しなさいと言われることよりも、自分の友達であるこの子とどうやってもっとしゃべれるか、この子のバックグラウンドにある宗教とかそういうものを、もっと知りたいよねっという気持ちにさせるかどうか、気持ちになれるかどうかというところが大事だと思

います。その点で言うと、愛知県っていうのは幸いにして外国籍の人がいっぱいみえます。多くは英語圏ではなくって、ポルトガルとか中国とかフィリピンとか、フィリピンは英語圏ですけども、彼らはポルトガル語だったり、中国語だったりタガログ語だったりっていう言葉をしゃべってですね、日本の公立学校に来れる子は来て、嫌だっていう子は来やしないという状況があるのですが、たくさんの外国人の子どもがせっかくいるのに、その子たちを、あるブラジル人学校とか、学校に来させない、来れない状況をそのままにしておくとかということですね、日本の学校の中に入れ込まないところもあるようですが、彼らが来てくれば、その子たちと様々な関係を通じて、外国人がいつもあるような状況っていうのができていく。そうすると、僕は言葉にしても宗教にしても、文化にしても学んでいこうというふうになると思います。

愛知県は他県に比べてその環境が整っている。愛知県のこの先に確実に起きていく課題というのは、たくさんいる外国人市民の人達とどうやってこの先ここで一緒に暮らしていくか、あるいは製造業であれば外国人の労働力が必要ですから、その人達をある所に押し込めるのではなくて、ある種日本の中の移民先端地域、どのみち日本も移民社会に向かっていくことは人口構造上避けられないだろうと思いますので、その中で愛知県のこの特徴というのを生かしてですね、ある特定の地域としての移民社会みたいなものを目指すような教育の形というのをやっていけると良いんじゃないかなというふうに思います。

<愛知県経営者協会専務理事兼事務局長 柴山忠範氏>

英語教育について、私はこの内容でこれが十分かどうかということはよく分かりませんが、しっかりやっていращやるなと思います。ただ、お考えいただきたいのは、社会に出てすぐに海外へ出かけて行って活躍する場合と、先程申し上げたように、会社の中で、日本の中である程度働いて海外へ行く場合と、いろいろなケースが考えられますが、会話というのは比較的忘れるのが早いんですね。海外から帰国子女で来た人も、3年も日本に住めばすっかり日本人になってしまうという話もあるように、学生時代に一生懸命やって流暢にしゃべれるようになって、やはり5年も日本で働いていれば、なかなか上手くいなくなる。そうすると、やはり学校の中で勉強していただくのは、大人になってからなんかこう蒸発していかない語学力、あるいは少し練習すればすぐ再生できるような語学力、こういったことをやっていく必要があるのではないかなと思います。

それから、コミュニケーションという分野に限って言えば、確かに英語というのは非常に重要な分野ではありますが、最近は現場の人も大勢海外に出るようになりました。そうすると現場の人ってほしい高校卒の人が多く、どちらかと言えば英語が苦手な人が多いのですが、先程何か得意分野があればなんとかなるという話がありましたが、英

語が単語だけでも、やはりこういう紙に書いたり、知恵を使ってコミュニケーションしようとするんですね。ですから、コミュニケーションの取り方を口から出る言葉だけにこだわらずに、コミュニケーションの取り方、知恵を出すという力を子どものうちに身に付ける、それから先程江口さんがおっしゃったように、物怖じしないような、場数を踏むってというようなことが大事ではないかと思えます。

<学校法人河合塾教育研究部長 谷口哲也氏>

グローバル人材を育成していく学校教育での必要な取組ですが、資料では、ほとんどが「送り出し」ですね。先程江川さんが言ったようにもう出ていなくていいのではないかな。たまたまオリンピックもあるし、日本に来てもらえばいいじゃないか。資料1の2ページの「イングリッシュキャンプ in あいち」には愛知県の少年自然の家で4泊6日もオールイングリッシュによる共同生活を送る取組がありますね。応募者は多かったけれど締め切っているという話でしたが、もっとどんどん定員を増やせばいいと思いました。学校の中でということであれば、白石先生からインターナショナルクラスという案が出ましたが、そのようなクラスを作らずとも、まず一緒に飯を食う、ランチセッションをやるというところから始めればどうか。本当は、国際寮で外国の子どもたちと日本の子どもが同じ寮に入るといいと思います。大学ならそういうことをやっているところがいくつかあります。ホームステイという話も出てましたが、家族も一緒に巻き込んで異文化体験をするということは、広い意味でグローバル教育ということではないでしょうか。

学校教育での取組で期待される1つ目について。送り出し（留学）の場合、最長で1年。普通は半年、1週間。しかし期間の長さが問題なのではないでしょうか。資料1の1ページのグローバル人材の概念の要素Ⅱ、Ⅲのヒューマンスキルや異文化に対する理解力をどうやって高めるかという取組というのが、資料ではあまりみえてこないような気がしました。先程、リーダーシップ教育の話をしました。問題解決場面をつくるためにはテーマが必要です。日本の歴史、日本の漫画文化などテーマを決めてセッションする、議論することが重要です。議論の材料はネットにありますし、自分の体験からも議論ができる。テーマ設定をして、それについての答えを探究していく訓練をする場面が教育のプログラムとしては必要ではないでしょうか。

2つめは、語学もちゃんとやらなければいけない。教室の外で生徒たちは日本語を使うでしょ。秋田の国際教養大学では、学生はキャンパスの中にいるときは授業以外でも一切日本語を使ってはいけない。学生は最初は辛いらしいけど、だから僕らは鍛えられると言っていました。学校ではどこまで英語漬けにするのかということが重要なのではないかと思えます。

3つ目は入試の話。入試が変われば教育が変わると半分は思っています。愛知県立大

学の出組が資料にありましたが、載っている出組は入ってからの話です。愛知県立大学の入試の一般入試は知識重視。わずかな地元からとる推薦入試でも入試科目は小論文と面接。小論文の中身は文章表現とか、いわゆる論理的思考力で、課題解決力を問うてはいません。外国語学部の推薦では英語が課されますが、これも筆記とリスニングだけで、スピーキングがない。例えば上智大学では「Test of English for Academic Purpose」、(TEAP) と言いますが、読む・書く・聴く・話すという4技能を測るテストを使った一般入試を行います。年間複数回実施して、ベストのスコアを持ってきていいということです。全国で7会場、複数回、このテストが実施されるようです。有名な東京外国語大学の前期入試2次科目は英語と世界史。世界史必須です。東京大学も3年後ですが、推薦入試でIBやTOEFLを条件にしている。愛知県の大学入試でもそうしないとなかなか、高校(特に普通科)では具体的に動きにくいのかなと思います。

<愛知淑徳大学文学部教育学科教授 中野靖彦氏>

先程、IBの中に英語が内包されていると言っていましたよね。私達が小学校の時は内包されていなかった訳です。例えば少なくとも日本語だけでは世界に通用していかないという現状がありますね。英語自身が内包されていない。それで今、一生懸命小学校からとにかく慣れさせるということで、英語をやっていますよね。そういう違いがありますので、そのところは今まだ日本はなかなか入っていけないところかなあと思っていたんです。先程から連携と言っていますが、外国に行っていた時に講演したことがありました。アメリカの場合ですけど。大学生になると、海外青年協力隊にすごく積極的に行くと言うんですよ。高校から広がって大学になると。ところが日本の場合は実は段々しぼんでいっちゃうんじゃないかということです。逆なのです、日本と外国の違いがあるとすると。なぜこういうことが起こっているのかということをいろいろ議論したことがあるんですが、女性でもアフリカですごく活躍する方が出てくるわけですね。先程も出しましたが、やはり英語が今みたいな入試の形で続けていたら、そうは変わっていかないのではないかと思います。

私も入試のヒアリングを監督しましたが、なんでこんな30分も神経を使わなければいけないのかと思いました。英語の試験を見ると、考えてみればセンター試験と同じことをどこの大学の入学試験でもやっているわけですよ。これで何が身につけているのかというと。要は、入試のテクニックをみているのでしょねと思いました。5択の中のどこが一番合いそうなのかを見ては、これはなかなか身につかないなあということを感じました。

高校になってからコミュニケーション、コミュニケーションではなかなか大変なものです。小学校、中学校、高校、大学とですね、例えばコミュニケーションにしる、或いはディスカッションにしる、やり方は変わってくるはずなんです。特に小学校のころは

慣れ親しむ、好きになってくれればいいと思うんですよ。中学校、高校になってきたときに、いろんなディスカッションとかプレゼンテーションであるとかの能力が実は身についてくるが日本語が十分にできなくて、いきなり英語でというのは無理なんです、所詮は。こういうことを考えていくと、小・中学校で例えばプレゼンテーションを、総合的な学習等で一応ある程度やってきている訳ですね。それを少しどこかで英語に変えてみるとか、ただ学校教育の中だけの1時間かなんかで、英語でコミュニケーションをとることは難しいと思います。

先程、谷口さんが日常の中でと言われましたが、私が先程言った外国に行った時にですね、味噌汁にこだわっていてはだめだと。一緒に食事をしている時に、なぜこれが食べられないのかといった時に、宗教の問題が出てくると思うんですよ。或いはなぜこれが好きなのかといったときに、うちの国ではこの料理だという話がでてくると思うんですね。そこからやはりコミュニケーションというものはできるので、教科書の中だけのコミュニケーションというのはなかなか難しいだろうと思うんですね。そのことを含めると私もどこかで、できるならば1か月も2か月も一緒に、英語などでお互いにしゃべりあう生活があったらすごく変わるのではないかと思います。そういう機会を、中学校、高校のレベルでいいと思いますが、もう少し積極的に進めることです。そういう機会があると参加してみたいと思って、一度参加してみると多分変わっていくと思うんですね。

私達は、教育の中の言葉と生活の中の言葉が分かれてしまっている訳です。要は、全部学校の中の教育で英語を学ぶのだと思いこんでいるんですね。そういうことを考えるとコミュニケーションというのは生活の中での一つのツールですから、そういうことを一緒に考えていかないとなかなかやはりうまくいかない。しかも留学生が減ってきています。ホームステイもお願いしてくるのですが、日本人は家の中が汚いですと断っちゃうんです、みんな。やっぱりこれは積極的に受け入れていきましょうと言っても無理なんです。そういう意味でいくとやはり家族も一緒に行って、例えば、1週間に一度でもいいから、外国語でお話できる場をある程度作って行って、慣れてきて自分のうちでも引き受けていこうか、あるいは出かけていこうかと考える状況を作っていないと、なかなか広がっていかないんじゃないかと、そんな気持ちを持っております。そういう機会をぜひいろいろなところでやってほしいと思います。

<愛知教育大学学長 松田正久氏>

先程、江川さんから内なるグローバル化という話がありましたが、つたない体験で言えば、例えば日本語と韓国語をみると、韓国語って結構発音が難しくてですね、韓国人は200近くの音声を聞き分けることができるんですね。文書構造は同じですけど、やっぱり耳が違うなということを僕は実感しました。先日韓国の大学に行きましたら、要するにグローバル化ということで、そこに滞在している外国人の奥さんとかに大学に来

ていただき、半年間、韓国の習慣、歴史等々のレクチャーをするんです。そのような半年間の課程を受けた外国人の奥さんとか、或いはそういう外国人の人達が、小学校や中学校に行っ、異文化体験のレクチャーをする非常勤講師として入るのです。これはどこでもやれるので、例えばそのようなプログラムを作って、日本の習慣等々をレクチャーした上で、何らかの資格、例えば異文化講師など、そのような人達をもっともっと活用する制度を愛知県が率先して作るのもいいと思う。多分、愛知県には、いろいろな国の人達があります。多分、東京について多いんじゃないでしょうか、国の数から言っても、割合から言ってもですね。

また、大学では外国人の子弟の学習支援を積極的にやっていますが、どうグローバル化するかと言った時に、やっぱり英語だけではなくて、中東の人もいるし、これだけいろいろな人達がありますので、その人達を通じて、先程言った宗教や民族や国境についても教えていただく、あるいは違いを教えていただくこと自身が異文化体験になってくるのではないかと思っていますところ。そういうことをぜひやっていただきたいし、語学教育はですね、僕はスウェーデンに2年いたのですが、最初にほかの国の人達と一緒にスウェーデンの語学学校に入ったんです。そのクラスではスウェーデン語しか使ってはいけませんが、すぐに英語が出ちゃうんです。なまじっか知っているんで、全然上達しないんですね。ほかの人達はみんな初級から上級に上がっていくんですよ。僕はずーっと初級で2年間終わったんですけど。語学の教育はやっぱり日本語圏と英語圏の人達、あるいはゲルマン系の人達というのは元が違うんですね。あとは、英語でみんな話していると、5人、10人集まって、わーっと英語でやっているって入っていけないんですね。僕は英語で喧嘩ができるまでになりたいなと思ったのですが、喧嘩の時は日本語になっちゃうんです。それでも雰囲気は分かるんですよ。コミュニケーションもとれるんですよ。だからなまじっか下手な英語を使うよりも、日本語でやったほうがよっぽどコミュニケーションがとれる、雰囲気で分かっちゃうんですよ。

だから、そういう度胸を持つことが大変大事なので、英語ができなくてはいやっぱりグローバル化してないよという話ではなくて、せっかく来ている人達の交流をもって教育の面でもですね、ここに書いてあるいろいろな発想でもって、いろいろなプログラムを教育委員会としてもお作りになって、先程言ったような外国人を活用することも入れて変えていくというのが、全く大事で、これからこのIB200校ですか、この目標も一つありますし、愛知県でどうされるのか。東京は都立中高一貫国際校を2つくらい持ってますね、僕の教え子が東京都立国際高校にいて、メールが来て、もうだいぶ年なのにいきなり外国に行かされて大変だと言ってきましたけれども、どういうふうな取組をされるのかわかりませんが、頑張っていたきたいなと思いますし。大学との連携も大事だと思います。アジアシフトとかアジアに目を向けて、名古屋大学も一生懸命アジアのほうに力をいれておられますし、やっぱり本学も教員養成ということで、日韓、日中韓

でいろいろミーティングをやったり、会議をやったりしています。そういうことでいえば、アジアにどう向けていくかという視点をこれから先考えていって、10年、20年先を見通さないといけないのではないかという気がします。

<漫画家 江川達也氏>

日本人の英語って結局発音がだめなんですよね。一番何がだめかという、英語の先生がちゃんとした発音をしてないんですよね。あと先生についてしゃべるじゃないですか。それが非常に致命的で、うちの娘も言っていました、英語の時間は英語をしゃべらせないで欲しいっていう。英語を日本人がしゃべることによって、同じ単語なんだけど、違う英語が入っちゃって、本物の英語が聞き取れなくなっちゃうんですよね。名古屋なんかでは、「HAVE」っていうね、何々を持ってるという単語はですね、名古屋の先生はですね、今は知らないですけど、“ヒャブ”っていうんですね。“ヒャブ”って言わないと怒られるんですよ。それで東京行って、“ヒャブ”って言うてるやつは大体名古屋出身なんですよ。どう考えても致命的で、“ヒャブ”で入っちゃうんで、絶対通じないんですよ、基本的に。みんな、日本人が発音するのはやめろって。先生が説明しなきゃいけない時はアプリか何かを使って、そこだけネイティブがしゃべったのを出すみたいなふうにしなないと、単語と発音が全く遊離しちゃうんですよ。これは絶対やらなきゃいけない。英語教育で英語をしゃべるなっていうのが一番最初の英語教育なんじゃないかと。

あと愛知県のいいところはですね、今あるかどうか知らないけど、リトルワールドという素晴らしい観光資源があって、ほとんど俺も行ったことないですけど、名鉄と協賛するかなんかして、リトルワールドに本当に行くと、その国の人しかいないリトルワールドみたいなのを作って、そこでは日本語をしゃべってはいけないというふうにして、言ってみれば世界を愛知県のどこかに作ってしまうという。学校でもいいんですけど、作ったほうがいい。そこで働く人達は日本語を絶対学ばせずに、日本語がしゃべれない人間にして、日本語をしゃべれない人とコミュニケーションするっていう場を作るのが一番だと思います。なまじね、日本にいる英語の先生は日本語しゃべれちゃうんで、甘えが出るんで、何言っても日本語が全く分からない外国人がそばにいとしゃべらざるをえないんで、“アイヒャブ”なんて言っても通じませんから、それで正しい発音になっていくんじゃないか。

昔ですね、ケニアの女性の人をホームステイさせたんですよ。その人は全然日本語しゃべれなくて、アメリカ仕込みのですね、ぐちゃぐちゃな英語でがががしゃべって、かみさんなんかは英文科なんだけど、結構しゃべれない教育を受けちゃったんで、しゃべれないんですけど。ただそういうふうにして日本語がわからない、いつまでも日本語を教えちゃだめなんです、外国人に。来させても。日本語をしゃべらないままにして、その人としゃべらせるっていう場所を作るっていうことが一番いいんじゃないかなと思

います。実際、全然日本語知らなくてしゃべれない人をこう、結構連れて行くわけですよ、いろんな浅草とかね。そうすると、これはなにかという英語で説明しなければいけないので、そういう意味でも自分達の日本っていうものをね。愛知県は、基本的に観光地ないんですよ。せっかくあるのに、観光地を開発させることを全然しないので、逆に日本に興味がある人をどんどん受け入れて、それを英語で説明することで、徐々にそれが広がっていくんじゃないかなと思うんで、まず、一番最初はアニメ漫画好きを日本に呼んでですね、そいつらに日本のアニメとか漫画を教えるというようなことをするのが最初かなと思います。

<リンデンホールスクール中高学部校長 大迫弘和氏>

もう一度国際バカロレアの話をさせていただきたいと思います。今日私がここに来させていただいたもう一つの理由になりますが、愛知県でIBに挑戦する学校が生まれてくれたらいいなという思いがあります。今、公立の学校で具体的に議会レベルまでいっているのが、滋賀県、京都府、札幌市。札幌市が一番進んでおります。興味を示しているところが、佐賀県、高知県、広島県、福井県あたりでしょうか。私、広島にIBの研究室を持っているので、広島の様子はある程度分かっているのですが、湯崎知事が県にIB校を作りたいという強いリーダーシップを発揮されて、県教委のほうにいろいろと発破をかけているような状態です。やはり県の知事さんがですね、うちでやろうというようなことがあると動きやすいのではないかなという思いもあります。

旭丘高校、それから名古屋大付属の高校は、今、研究指定校としてやっていらっしゃいますが、それと今回の200校とはちょっと別ですので、両校があるからと言って、愛知県の中に国際バカロレアの学校ができるというような流れにはならないような気がしますので、別の流れの中で是非とも愛知県でという思いがあります。

テーマの学校教育においてどういうことかということで申しますと、愛知県の取組は、非常に制度設計としてはよくできているとは思っています。ご努力をされて、いろいろなアイデアで制度を作っていらっしゃるというふうに思います。ただやっぱり根本に流れている考え方というのが、ある程度変化していかないと、せっかくの制度というのがグローバル化というところに向かっていかないのではないかな、それを、ではどういうふうに根本のところを新しくしていくのかということで、またIBについてお話をさせていただきます。

なぜIBを今日本の国で入れようとしているのか、3点のポイントで申し上げますと、IBの1点目の大きなポイントは、IBの教育は日本の今までの暗記型事実学習ではないんですね。探究型概念学習ということで、事実に基づいて探究しながら他の事例に適用、活用できる概念を勉強していくというようなことになります。そのような勉強をしている生徒がどのような生徒であるか、例えば入試の話で申しますと、IBでものすごいハイ

スコアをとって、それこそ世界のどこの大学にでもいけるような生徒が、日本のセンター試験の問題を見たとき、その子は日本語で漱石を読んで論文を書いてしまうようなバイリンガルの子です、その子が「先生全く分かりません。」と言うのです。そういうものなんですよね。全然トレーニングが違うので、そここのところをどう考えていくか、ものすごく大きな問題だと思います。

2つ目のポイントは、リベラルアーツですね。高校までは須らく、あまねくいろいろな勉強をして、大学のところでそれぞれの才能を開花させていくという、現在、教育再生実行会議の方も同じような方向性を出していますけれども、IBというのは理系だからと言ってやらなくていい科目はありません。文系だからと言ってやらなくていい科目はありません。これは日本の高校の中でよく聞く言葉です。僕は理系だからこれはやらなくていいんだ、そういうことはありません。もちろん理系的な教科が好きな子、文系的な教科が好きな子、それはタイプがありますので、それぞれに対して何が好きかというのは分かれていますけれども、どういう方向に進んでいきたくても高校卒業までは全部やる。しかもグループ6というのは芸術なんですね。6科目のうちの1つは芸術。これを高校卒業までに全員やるんだという考え方、これもすごく大事で、日本の進学校の場合は、受験に関係ないからだいたい高1で芸術おしまい、高2、高3は関係ないからもうやめとけというのが多いと思います。そこは、IBでは断固おかしいと、18歳まではそこもやるんだと言っております。

最後は全人教育ですね。ホリスティックラーニングとありますが、極端に言えば、教科の学習も全人教育の一部、それぞれの教科の学習ももちろん大事です。だけれどもそれが全てではなくて、全人的な成長の中の一部として考えているというところが、今回このIBが日本の教育の中に入っていく意味だと思っています。そういうものが、これからの日本の教育、愛知県の教育の取組の中に少しでも入れ込んでいただければというふうな思いがございます。

<大村知事>

グローバル人材育成の取組につきまして、ご意見をいただきました。さらに追加して、ご意見があれば、言っていただきたいと思います。

<漫画家 江川達也氏>

勝手なアイデアですが、大学入試の筆記試験をやめて、日本語を全く分からない外国人を呼んできて、その人に何か英語で説明させて、その人が評価するような試験に変えれば、確実に英語力が分かると思います。

<愛知淑徳大学文学部教育学科教授 中野靖彦氏>

それはそれでいいと思いますが、ただそれができるためには、義務教育の段階でちゃんと基礎だけはしっかりしておかないといけないと思っています。義務教育とその後の教育のリンクは必要だと思います。一番いいのは、大学入試から英語をなくしてしまえばいいんですね。

<リンデンホールスクール中高学部校長 大迫弘和氏>

大学入試に関してですが、小学校の英語は、実は話す・聞くという、4技能のうちそこがすごく大きいんですね。それが小・中・高校と進んでいくと、音楽で言うデクレシェンドですね、どんどんどんどん小さくなって行ってしまって、ほとんどゼロになってしまう。それはなぜかと言うと、入試という問題があるのですが、なぜ日本の子どもたちの英語の力が伸びないのか。受験のための英語と、使える英語というのが、二律背反みたいに言われるのですが、これを単純に一緒にすればいい。そこを二律背反的に考えているところがおかしい。使える英語と入試英語は違うという状態を解決するというのが、すごく大事だと思います。

<大村知事>

ありがとうございました。それでは、今日いただきましたご意見を、またしっかり受け止めさせていただいて、今後、私どもの教育の現場におきまして、生かしていければというふうに思っておりますので、よろしく願いいたします。

それでは、次に報告事項を報告させていただきたいと思います。第2回、第5回の懇談会で、皆様方からご意見をいただきまして、教育委員会で検討を進めておりました愛知県公立高校の全日制課程における新しい入学者選抜制度のあり方につきまして、先週1月29日に検討結果のとりまとめが得られました。そのポイントにつきまして、教育長から簡潔に説明をさせていただきたいと思います。

<野村教育長>

本教育懇談会でもご議論賜りました高校の入学者選抜制度ということですが、1月29日に、愛知県公立高等学校入学者選抜方法協議会議を開催いたしまして、そのあり方についてまとめを得ましたので、ご報告をさせていただきたいと存じます。

2枚目が全日制課程における入学者選抜制度の改善について整理したものでございます。3枚目、4枚目がまとめの全文でございますが、説明は、2枚目でさせていただきたいと思います。

昨年5月に、「愛知県公立高等学校入学者選抜方法の改善に関する検討会議」において、教育懇談会でいただきましたご意見も踏まえながら、新しい入学者選抜制度の大枠につ

いてのまとめを得たところでございます。これについては、一度この教育懇談会でもご報告をさせていただいたところでございます。

主なポイントは、学力検査は、これまで以上に思考力・判断力・表現力等を測るものとなるようにすること。現行の推薦入学を一般入学の日程の中に取り込み、「推薦枠」の選抜として実施することにより、入試日程を短縮すること。尾張学区については、群及びグループの一部見直しと、1・2群共通校の設置を行い、三河学区については、二つの群を一つにし、グループ分けの見直しを行うこと。こういうことなどを、昨年5月の検討会議の取りまとめとさせていただいたところでございます。

その上でさらに、この新しい入学者選抜の大枠に基づいて入学者選抜方法協議会議において、制度の詳細部分について専門員会を含めると10回にわたる検討を重ねてまいりまして、1月29日の本会議において、入選協としてのまとめが得られたものでございます。

今回のまとめの内容について、特に改善のポイントとなる点を中心にご説明いたします。

まずは、学力検査の検査時間、学力検査の配点に関する改善点でございます。

学習指導要領に示された新しい学力観に立って、思考力、判断力、表現力等をこれまで以上に測る学力検査問題とするためには、検査時間を延ばすこと、また、1教科あたりの配点を増やすことが必要であるとされ、そのため、検査時間は外国語以外の各教科は、現在は40分でございますけれど、それを45分、外国語につきましては、聞き取り検査は現行どおり10分間程度とし、筆記検査を40分とする、また、配点でございますが、これまでは各教科20点ございましたけれども、それを22点とし、学力検査合計得点の最高を110点とすることといたしました。

次に、入試日程についてでございます。

本県の入試日程は、他県と比べますと入試日程が全体的に遅くなっておりまして、今回の改善により、推薦入学を「推薦枠」として一般入学に取り込んで同日に実施することなどにより、通信制課程後期選抜の合格者発表日を含めて、年度内に全ての入試日程が終了できるよう、また、中学校3年生の3学期に少しでも長く落ち着いた学習環境を確保できるようにするため、入試日程を短縮するよう、教育委員会事務局と関係機関の間で今後、調整しながら決定することといたしました。

それから、推薦枠の選抜基準についてでございます。

選抜基準の改善点といたしましては、これまでは職業学科の中でも農業科、水産科、福祉科及び衛生看護科で実施されてまいりました後継者に関する選抜基準というものを、工業科、商業科及び家庭科を含めて職業学科全体に拡大し、職業学科のさらなる活性化につなげることとしました。

最後に、新しい入学者選抜制度の実施時期についてでございます。

実施時期につきましては、現在の小学校6年生が受検する平成29年度入学者選抜から実施することといたしました。また、新しい群及びグループ分けを適用する年度も、新しい入学者選抜制度の実施にあわせて、平成29年度入学者選抜からとすることといたしました。

以上が今回の入選協でまとめを得た、新しい入学者選抜制度の詳細部分でございます。

今回、検討会議のまとめと、入選協のまとめが出そろいまして、新しい入学者選抜制度の制度設計のための指針は示されたと思っておりますので、今後は、教育委員会が新しい入学者選抜制度の実施に向けて準備を進めてまいりたいと考えております。

<大村知事>

この件につきましては、度々、ご議論、ご意見をいただきましたが、そういった形で方向性を取りまとめさせていただいたわけですが、これにつきまして、また何かご意見があればいただければと思います。

<共立総合研究所取締役副社長 江口忍氏>

第2回の懇談会で、私案を出して、その後、入学者選抜制度の改善に関する検討会議で一定の方向性が出て、それで入選協で今回具体的になったわけですが、前の検討会議で大体の方向は見えていたので、こんな感じになるかなとは思のですが、私自身の考えとは全然違うものが出てきているわけですが、一番残念だなあと思うのは、学力テストと内申のウエイトの部分について、今、原則100対90というのが、1教科22点にして、110対90、1.5倍すると165対90と、変わったと言えば変わったけど、変わっていないと言えば変わっていないという印象です。

特に、今日のグローバル人材の話のところにも出てきましたが、私自身は中学校の段階に、内申書というのが、子どもたちの様々な活動、意見表明などに、負の影響を与えていると思っておりますし、そういうことをおっしゃっている方のお話を何人も聞いております。今日、大迫さんの国際バカロレアのペーパーで、「IB 学習者像」で挙げられている10項目の中で、「Risk-takers」、「今までにない方策、考え、役割を試そうとする自立的な精神を持っている。恐れず自分の信念を明言することができる。」という子が、本当に内申点が取れるのか、という疑問としてあるんですね。多分、そんなことはない、学校はちゃんとこういうのを見ているんだとおっしゃるのかもしれないですが、そうじゃない人はいっぱいいると思うんですよ。なので、やっぱりどうしても内申のところには引っかかるというのが、今さらの感はありますが、申し上げたいというのが一点。

もう一つ、今日の議論の中で、いろいろな方が表明されていましたが、入試制度というのは、学校教育にもものすごく大きな影響がある。どういう入試制度にするかによって、学校で何を教えるか、子どもらが自分たちで何を学ぶか、塾で何を教えるかが決まって

くる。そういう点で言うと、入試制度というのは、単に教育の話ではなくて、社会政策とか、地域戦略とか、産業戦略とか、そういうところに深く関わると思うのです。そのようなテーマについて、これは教育委員会のマターだからということで、教育委員会の中で会議を作って、そこで議論をして、これでおしまいよというのは、私はどうも違和感があるなと思う。今、国では、教育委員会と首長との関係が旬な議論として、また出ているところですが、それはどういう決着になるかは分かりませんが、今回、教育懇談会というのを知事が設けられて、入試制度について議論をしましょうというお話をされたというのは、それはやっぱり入試制度というのは、教育の専門家だけではなくて、他の意見も聞いて、教育以外のところに波及するお話だからということで、ここで取り上げられたんだと思います。ゆえに、教育懇談会というのは、どういう目的で、ここで議論されたことが、どう現実には波及していくかは、分からない部分がなかなかあったわけですが、この先、この懇談会のあり方を含めて、大村知事には、是非入試制度改革に対してどう向き合っていくかということ、正面からご検討いただきたいというふうに思います。

<学校法人河合塾教育研究部長 谷口哲也氏>

今の江口さんのお話は、制度面でおっしゃったのですが、もう制度面はしょうがないですか、あとは中身じゃないですか。中身というのは、問題の中身ですよ。思考力、判断力、表現力を今まで以上測るために、10点上げた。点数とか、時間とかじゃなくて、その記述量がどうなるのか、思考力や表現力をどの程度測る問題にしていくのかということまで見ないと判断できない。ここで申し上げたいのは、教育長が「はい、終わり」じゃなくて、この後、どんな問題を作るかまで責任をもってもらうということです。単に時間が5分増えて、45分になったじゃないかといわれぬように。そこは一つよろしくお願ひしたいと思います。

<愛知淑徳大学文学部教育学科教授 中野靖彦氏>

皆さんご存知のように、東大が推薦入試とかAO入試を取り入れる。これは実は、全国的な流れで、点数だけ見てもグローバルにならないというところから来ているわけです。これまでいろいろ推薦ということをやられていますが、学校で本当に活躍したとか、そういうのをいかにうまく推薦していけるかです。同時に、考えていく、判断していく力を、うまくテストの中で測っていくということ、これから取り組んでいくことです。しかも推薦というのはこれからいろいろな形式をとっていくと思うんですね。取る方もしっかりそういう姿勢を見ないといけないですから、そのへんのことが、これから大きくいろいろな形に変化してくるので、そのへんのことも含めてこれからまたそれぞれの対応がでてくるのではないかと考えております。

<愛知教育大学学長 松田正久氏>

長時間、一年間にわたって議論された結論がここに出ましたので、これはこれで良とするのですが、ただし、思考力、判断力、表現力を5分の中で測れるかというのが、なかなか疑問があるところです。やっぱり入試問題を作られて、今現在、どういうふうに評価をされているのか知りませんが、第三者も含めた入試のこうした視点の評価をきちっとやられて、積み重ねられた方がいいのかなと思います。やっぱり質を問うような客観性をもった、これなかなか視点が違いますので、思考力はどうやって、判断力はどうなっている、表現力はどうというのは課題があるので、大きく評価できる体制の下で入試問題を作り、その評価を受ける。いろいろ問題提起がありましたので、前向きにきちんと検討を進めていただければありがたいと思います。

<大村知事>

ありがとうございました。

それでは、長時間に渡りまして、貴重なご意見をいただきまして、ありがとうございました。最後は入試の話をさせていただきましたが、グローバル人材をどういうふうに育成していくか、英語力強化をどうしていくのか、国際バカロレアにどう取り組んでいくのか、今、私ども旭丘高校で取り組んでおりますが、こうした取組をどう広げていけるか、方向性としてはそういう方向性だと思いますので、大迫先生にまたご指導いただきながら、是非広げていければというふうに思っておりますので、よろしくお願いを申し上げます。

今日いただいたご意見を踏まえまして、来年度、愛知県の県立高校改革の基本計画を作ろうと思っております。そういったところにも、グローバル人材育成という観点も入れていきたいと思っておりますので、また、ご意見をいただければありがたいと思っております。

それでは、今日、盛りだくさんのご意見をいただきまして、本当にありがとうございました。また、引き続きよろしくお願い申し上げ、今日の懇談会は以上とさせていただきます。

以 上